

# 4-2

## 学校組織としての取り組みと 子どもの「読解力」

ベネッセ教育研究開発センター主任研究員 田中 勇作

### はじめに

前節では、教師の日常的な学習指導の状況が子どもたちの「読解力」向上に極めて大きな影響を及ぼしていることを明らかにしてきた。しかし、だからといって「読解力」の向上が教師個人の力量のみで成し得るということでは決してない。先行する「基本調査2004」で検証したように、「教師の指導力(FAN)」は「学校の経営力(MORE)」によってより一層高められ、単に教師個人の力量の向上にとどまらず、学校全体としての積み上がる取り組み(学校文化)となり、「読解力」の育成・向上においても例外ではないというのが私たちの基本的なスタンスである。

特に、「読解力」については、これまでの学習指導要領の中では明確に規定されておらず、育成についての系統立った理論や教育実践も十分とは言えず、「読解力」育成を明確に念頭においた教育課程の編成や教材開発、指導研究等は教師が個人のレベルで対応できるものではなく、学校組織として取り組んでいくべきテーマであることは言をまたない。

そこで、本節では学校組織としての取り組みや、それを支え推進する学校経営の状況が「読解力」向上に及ぼす影響を、第2章1節で紹介した「読解力向上に関する取り組みの基本構造モデル」(図表2-1-6)における第Ⅱ層および第Ⅲ層の枠組みに沿って探ることとする。

### 1 学校組織全体としての教育環境の整備・充実の違いが、子どもの「読解力」スコアの差異として現れている

「読解力」の向上において、教師の日常的な学習指導の重要性は誰一人否定することのない自明の理であろう。しかし、教師の指導力や資質の向上が叫ばれる中で、その学習指導の力量の差異は何によって発生するのか、またそうした教師の学習指導の効用が一層発揮される条件とはどのようなものであるのかといった観点は話題にされることが少ない。

私たちは、教師の日常的な学習指導の差異を個人の資質や自助努力といった属人的な要素に加え、学校組織としての取り組みや環境、制度、更にはそれらを支える学校の風土や文化といった要素の違いにまで求め、「学力向上のための基本調査2004」の報告書『総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす』の中で考察・検証を行ってきた。

今回の調査では、これまでに提唱してきた「総合教育力モデル」の「教師の指導力(FAN)」と「学

校経営力(MORE)」の中間的な概念として、前述の「読解力向上に関する取り組みの基本構造モデル」(第2章1節図表2-1-6参照)の第Ⅱ層「(Ⅱ)教育環境の整備・充実(FAN+MORE)」に示した「学校の組織力(の発現結果)」ともいえる領域・項目を設定した。

本節では、まずその第Ⅱ層の各下位領域(Ⅱ-a~c)の各項目について、教師・および校長の回答と子どもたちの「読解力」スコアをクロスさせ、その関係を探った。

図表4-2-1では、前節の図表4-1-3に準ずる手順で、「学校組織全体としての取り組み状況」の違いによる子どもたちの「読解力」スコアを学年別に比較するとともに、学年によってどういう項目がより有効となっているかを示した。なお、クロスの集計単位は、小中ともに「教師集団平均スコア」Vs「学年全体『読解力』スコア」としている。

また、図表化に関する詳細については前節の「2. 子どもの発達段階に応じた『読解力』育成の視点」を参照いただきたい。

なお、図表内の設問番号欄の「管問8-〇」および「教問6-〇」は、前者が「校長調査」後者が「教師調査」の設問であることを示す。

図表4-2-1 学校としての教育環境整備状況と子どもの「読解力」スコアの関連

カテゴリー	設問番号	設問内容	学年	上位群	下位群	差異	検定	分類
Ⅱ-a	①学校図書館の充実・活用 管問8-12	学校図書館の充実に努め、授業での活用や家庭での読書を促している。	小5	51.5	49.9	1.6	-	中2?
			中2	52.6	48.9	3.7	?	ケース⑧
	②公共施設の活用 管問8-13	公共の図書館や博物館、美術館などの文化施設の活用を促している。	小5	50.4	50.7	-0.3	-	中2?
			中2	54.2	46.6	7.6	*	ケース⑦
	③ICTの充実・活用 管問8-14	インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に努めている。	小5	52.0	46.0	6.0	*	共通?
			中2	51.2	44.6	6.6	?	ケース⑩
	④言語環境の整備 管問8-15	教師の日常の授業での言葉遣いや話す・聞くルールを定め、校内の言語環境の精錬を図っている。	小5	49.8	53.3	-3.5	+	中2
			中2	52.8	47.7	5.1	+	ケース⑤
Ⅱ-b	①各教科での基本的指導 教問6-1	各教科において「思考・表現」の指導の在り方や意義が明確にされ、それに沿った指導がなされている。	小5	51.5	48.0	3.6	+	小5?
			中2	49.8	50.2	-0.4	-	ケース③
	③課題探求活動 教問6-3	各教科の学習指導において、課題探求型の活動を取り入れている。	小5	53.9	49.1	4.8	+	小5
			中2	51.0	49.4	1.6	-	ケース②
	④グループ協働活動 教問6-4	各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入れている。	小5	54.0	48.3	5.8	*	小5
			中2	50.2	49.9	0.3	-	ケース②
	⑥メディア表現活動 教問6-6	各教科の学習指導において、コンピュータやビデオ、ポスター等多様なメディアを用いて、自分の考えを表現する活動を取り入れている。	小5	50.5	49.3	1.3	-	中2?
			中2	52.4	48.7	3.7	?	ケース⑧
⑦職場体験・キャリア教育 教問6-7	職場体験や社会人講師による講話等を行い、勤労観やキャリア意識を養う活動を取り入れている。	小5	53.4	48.8	4.7	+	小5?	
		中2	48.2	52.4	-4.1	?	ケース③	
Ⅱ-c	①総合的な学習 教問6-8	総合学習等において、実社会や日常生活に関わるテーマや題材を扱い、実際の場面で体験・実感する機会を取り入れている。	小5	50.9	47.7	3.2	?	小5?
			中2	49.2	51.1	-1.8	-	ケース③
	③家庭での活動 教問6-10	学校で学んだことを、家庭や身の回りの事象に応用したり、試したりするような課題や機会を用意している。	小5	51.0	47.9	3.1	?	小5?
			中2	49.6	50.5	-0.9	-	ケース③
	④地域への発信 教問6-11	学習の成果を地域社会に向けて発信したり、地域社会の抱える課題への解決提言を目標としたプロジェクト学習を取り入れたりしている。	小5	52.4	48.8	3.6	?	小5?
			中2	48.2	51.8	-3.6	?	ケース③

さて、図表4-2-1に載せなかった項目も含めて、本調査では「(Ⅱ)教育環境の整備・充実(FAN+MORE)」の状況を問う設問を15項目用意したが、小5・中2共に、「読解力」スコアが上位群>下位群とならなかったのは「教問6-9 各種のコンクールへの応募を促したり、学習の成果を保護者や地域社会に向けて発信するような場や機会を意図的に用意したりしている。」(Ⅱ-c)の1項目のみで、その他の項目では小5か中2、あるいは両学年において、子どもたちの「読解力」スコアは「上位群>下位群」となる傾向が見られた。

しかし、よりデータの信頼性を高めるために、両群の平均値の差の検定を行った結果、小5・中2

共に「読解力」スコアに対して明らかに関連がないと判断した項目(危険率20%以上)は2項目あったが、残り8割(12項目)は小5か中2、あるいは両学年の子どもたちの「読解力」育成にかなり強く関連しており、前節で見た教師の日常的かつ直接的な学習指導以外にも、こうした色々な観点・領域における学校全体としての教育環境の整備・充実が、子どもたちの「読解力」育成と関連しており、「『読解力』は教師・学校・家庭の総合的な働きかけのもとに育成される」という基本仮説3の検証の目処は前節以上に立ってきたと言えよう。

また、図表4-2-1に挙げた12項目は、小5または中2のどちらか(あるいは両方)が20%未満の

水準で有意差ありと判定されたもので、少なくともどちらかの学年で「読解力」スコアと正の相関を示す、言い換えると「読解力」向上に関連の高い項目であることを付記しておく。

以下、図表4-2-1に基づき、【A. 小5の「読

解力」育成により大きな影響を及ぼす項目】、【B. 中2の「読解力」育成により大きな影響を及ぼす項目】、および【C. 両学年の「読解力」育成に共通して大きな影響を及ぼす項目】に分けて、その特徴や傾向を見ていくことにしよう。

### 【A. 小5の「読解力」育成により大きな影響を及ぼす項目】

それでは、まず小5においてより有効であると考えられる項目から見て行くことにする。

設問番号	設問内容	カテゴリー		分類
教問6-3	各教科の学習指導において、課題探究型の活動を取り入れている。	Ⅱ-b	③課題探究活動	小5
教問6-4	各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入れている。	Ⅱ-b	④グループ協働活動	小5
教問6-1	各教科において「思考・表現」の指導の在り方や意義が明確にされ、それに沿った指導がなされている。	Ⅱ-b	①各教科での基本的指導	小5?
教問6-7	職場体験や社会人講師による講話等を行い、勤労観やキャリア意識を養う活動を取り入れている。	Ⅱ-b	⑦職場体験・キャリア教育	小5?
教問6-8	総合学習等において、実社会や日常生活に関わるテーマや題材を扱い、実際の場面で体験・実感する機会を取り入れている。	Ⅱ-c	①総合的な学習	小5?
教問6-10	学校で学んだことを、家庭や身の回りの事象に応用したり、試したりするような課題や機会を用意している。	Ⅱ-c	③家庭での活動	小5?
教問6-11	学習の成果を地域社会に向けて発信したり、地域社会の抱える課題への解決提言を目標としたプロジェクト学習を取り入れたりしている。	Ⅱ-c	④地域への発信	小5?

「明らかに小5で有効」と判定された項目の一つに、「教問6-4 各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入れている。」(Ⅱ-b. ④グループ協働活動)があるが、これは前節の教師の日常的な学習指導の中でも「明らかに小5で有効」と判定された「学び合う集団形成」に関する2項目(教問6-21、教問6-24)とも合致するものと言え、小学校高学年における「集団による思考の練り上げ」の有効性を改めて示唆する結果となった。

また、もうひとつの「明らかに小5に有効」な項

目である「教問6-3 各教科の学習指導において、課題探究型の活動を取り入れている。」という項目を含め、ここに挙げられた項目はいずれも、私たちが基本調査2004で検証した「総合教育力モデル」における「教師の指導力(FAN)」の下位領域に当たる「プロジェクト的学習指導」に相当するものであり、それらが「読解力」の育成において有効と判断される結果となったことは特筆に値する。

そして、それらが「総合的な学習」の中だけでなく、「各教科の学習指導において」取り入れられているという点が重要なポイントであろう。

## 【B. 中2の「読解力」育成により大きな影響を及ぼす項目】

次に、「中2においてより有効」となった項目について見ていこう。

設問番号	設問内容	カテゴリー		分類
管問 8-15	教師の日常の授業での言葉遣いや話す・聞くルールを定め、校内の言語環境の精錬を図っている。	Ⅱ-a	④言語環境の整備	中2
管問 8-12	学校図書館の充実に努め、授業での活用や家庭での読書を促している。	Ⅱ-a	①学校図書館の充実・活用	中2?
管問 8-13	公共の図書館や博物館、美術館などの文化施設の活用を促している。	Ⅱ-a	②公共施設の活用	中2?
教問 6-6	各教科の学習指導において、コンピュータやビデオ、ポスター等多様なメディアを用いて、自分の考えを表現する活動を取り入れている。	Ⅱ-b	⑥メディア表現活動	中2?

まず、特徴的な点として、中2で有効となった項目は「Ⅱ-a」のカテゴリー、すなわち、「豊かな素材に触れる環境の整備・充実」に属するものが多いことがあげられる。実は、このことは「Ⅱ-b 読解力育成を支える豊かな教育カリキュラムの整備・充実」や「Ⅱ-c 実社会への適用の場や機会の設定」に関する項目に集中する一方、「Ⅱ-a」の項目の有効性があまり認められなかった先の小5とは対照的な傾向を示している。

ただ、この結果から中学校においては、「プロジェクト的学習指導」が「読解力」向上に有効ではないと判断することは妥当とは言えない。というのも前節でも述べたように今回の中学校の調査サンプルのうち特定の1校が残りの他校とは極端に異なる傾向を示しており、その1校で「読解力」スコアを大きく押し上げているという状況がこの第Ⅱ層に関する結果にも少なからず影響を及ぼしているからである。ちなみに、その1校を除いて集計をし直したところ、「Ⅱ-b」に関する項目を中心に、上位群と下位群の「読解力」スコア(偏差値)の差異は2前後大きくすることが確かめられており、

少なくともそうした「プロジェクト的学習指導」が中学校における「読解力」向上に有効ではないと判断しきれない結果を示すことを付記しておく。

なお、「両学年に共通して有効」となった項目は、「管問8-14 インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に努めている。」(Ⅱ-a)のみであったが、「読解力」が従来通りの印刷文字情報の枠に止まらない多様な情報を対象としていることを考えると極めて納得性の高い結果と言えよう。

以上、データに基づきながら、子どもたちの「読解力」向上に重要な役割を果たしていると考えられる学校組織全体としての取り組みの効用について、学年による違いも交えながら簡単に見てきた。前節同様、学年による効用の違いという点では今後の課題として残されたものもあるが、ここまでの分析結果は今回の調査における基本仮説3「『読解力』は、『総合学力』と同様、教師・学校・家庭の総合的な働きかけのもとに育成される」について、先の教師個人の総合的な働きかけに加え、学校組織としての環境整備に関わる部分についても検証することができたものとする。

## 2 「読解力」向上に対する教育環境の組織的整備状況を測る指標の設計

これまで見てきたように、子どもたちの「読解力」の育成においては、教師個人の学習指導状況のみでなく、教育的環境や学校全体としての豊富な教育カリキュラムの整備、更には学びを実社会の場面にまで適用させていこうとする学校教育活動全般にわたる組織的な取り組みが重要な役割を果たしていることが確認できた。

次に、前節で行った、教師の日常的学習指導総合スコアの尺度構成に準じて、「(Ⅱ)教育環境の整備・充実」の状況を測る指標の構築を行った。なお、ここでも例によって小学校高学年向けのみを掲載した。その結果を示したものが、**図表4-2-2**である。

図表4-2-2 小5における「読解力」スコアと関連の強い組織的取り組み上位9項目

カテゴリー	設問番号	設問内容	読解力		国語		算数		2教科総合	
			アイテムレンジ	影響度順位	アイテムレンジ	影響度順位	アイテムレンジ	影響度順位	アイテムレンジ	影響度順位
Ⅱ-a	管問 8-12	学校図書館の充実に努め、授業での活用や家庭での読書を促している。	0.88	8	0.59	8	3.40	4	2.40	5
	管問 8-14	インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に努めている。	7.05	1	8.78	1	6.77	1	7.99	1
Ⅱ-b	教問 6-1	各教科において「思考・表現」の指導の在り方や意義が明確にされ、それに沿った指導がなされている。	1.81	5	3.48	4	2.19	5	2.85	4
	教問 6-3	各教科の学習指導において、課題探究型の活動を取り入れている。	0.27	9	0.50	9	4.85	2	3.28	3
	教問 6-4	各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入れている。	5.91	2	0.94	7	2.14	6	0.96	9
	教問 6-7	職場体験や社会人講師による講話等を行い、勤労観やキャリア意識を養う活動を取り入れている。	3.94	3	5.62	2	1.26	8	1.57	6
Ⅱ-c	教問 6-8	総合学習等において、実社会や日常生活に関わるテーマや題材を扱い、実際の場面で体験・実感する機会を取り入れている。	1.70	6	4.36	3	1.16	9	1.11	8
	教問 6-10	学校で学んだことを、家庭や身の回りの事象に応用したり、試したりするような課題や機会を用意している。	2.93	4	3.04	5	4.11	3	3.88	2
	教問 6-11	学習の成果を地域社会に向けて発信したり、地域社会の抱える課題への解決提言を目標としたプロジェクト学習を取り入れたりしている。	1.39	7	1.22	6	1.49	7	1.46	7
			Spearman順位相関		読解力Vs国語		読解力Vs算数		読解力Vs2教科総合	
			r <sub>s</sub> =		0.683		0.033		0.067	

ここに示した9項目を以って、「読解力」向上に関わる組織的「教育環境の整備・充実」状況(以下、組織的教育環境整備状況とする)を測定するための総合指標としようとするが、この図表4-2-2では、前節同様、これらの項目からなる総合指標が国語や算数といった他の教科との共通因子のみでなく、「読解力」向上における固有の因子に関連するものを測定できているかどうかを確認している。詳細については、前節を参照していただきたいが、Spearmanの順位相関係数を算出したところ、「読解力」と「国語」との間では0.683、

「読解力」Vs「算数」では0.033、「読解力」Vs「2教科総合」では0.067となり、国語との間に共通する部分はあるものの、前節で見た20項目に比べて、より「読解力」向上に固有的な要素・側面をも考慮できていると判断した。

そこで、これらの9項目をもとに、Ⅱ-aからⅡ-cの3つのカテゴリー単位で、調査対象となった各小学校における組織的教育環境整備状況スコアを算出し、子どもたちの「読解力」スコアとどのような関連を示すのかを探ることとする。

図表4-2-3 組織的教育環境整備状況スコアによる「読解力」スコアの違い (小5)

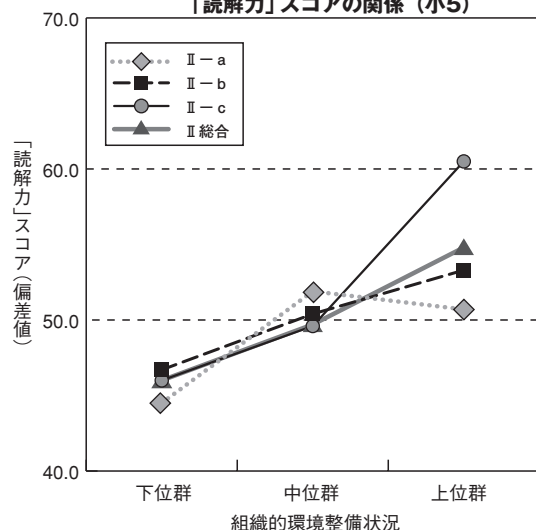
	下位群	中位群	上位群	差異 (上位-下位)	P値
Ⅱ-a 豊かな素材に触れる環境の整備	44.5	51.9	50.7	6.3	P=0.109
Ⅱ-b 豊かな教育カリキュラムの整備	46.7	50.4	53.3	6.6	P=0.131
Ⅱ-c 実社会への適用の場・機会の設定	46.0	49.6	60.5	14.4	P=0.096
Ⅱ 教育環境・教育課程の整備状況全体	46.0	49.7	54.8	8.7	P=0.151

図表4-2-3は、先の9項目に対する各校教師・校長の回答状況を、Ⅱ-aからⅡ-cの3つのカテゴリーごとにスコア化し、そのスコアの大きさによって学校を3群に分類し、各群の子どもたちの「読解力」スコア(偏差値)を比較したものである。

なお、前節の「読解力指導状況スコア」と同様、各項目のスコア化に際しては、「とてもあてはまる；4」「まああてはまる；3」「あまりあてはまらない；2」「まったくあてはまらない；1」とし、各カテゴリーに属する項目についての合計値(カテゴリー別整備状況スコア)を算出している。また、そのカテゴリー別整備状況スコアを偏差値換算し、60以上を「上位群」、40以上から60未満を「中位群」、40未満を「下位群」として教師を3群に分類した。

図表内の「差の検定」欄の数値は、上位群と下位群の「読解力」スコアの平均値の差(上位群-下位群)を検定したp値を示す。

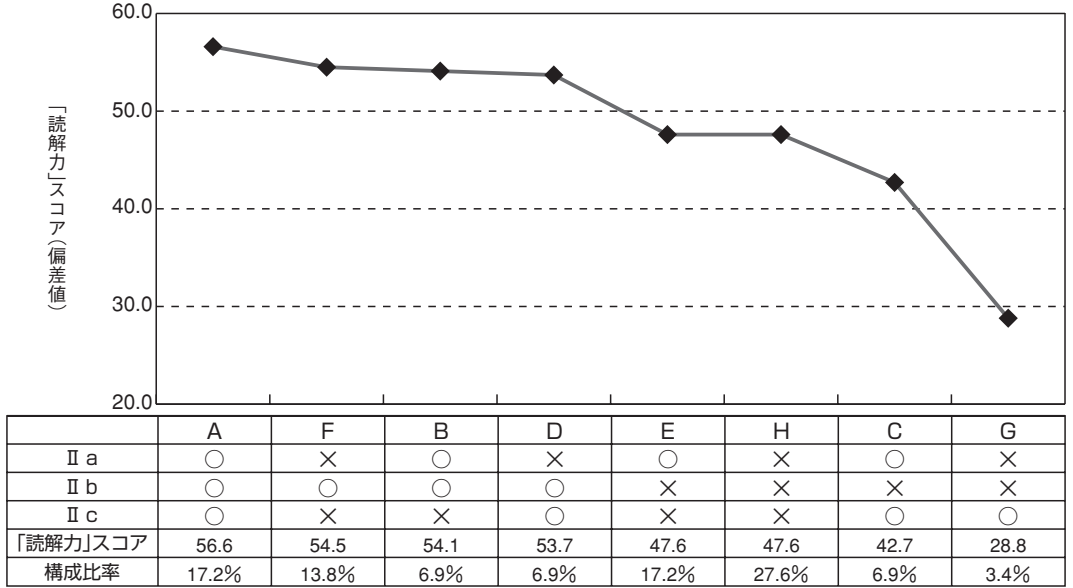
図表4-2-4 「組織的環境整備状況スコア」と「読解力」スコアの関係 (小5)



さて、図表4-2-3の結果から見る限り、残念ながら今回設定した9項目が「読解力」向上に関わる学校全体としての「教育環境整備状況」を適切に判定する指標として十分であるとは言いきれない。もちろん、図表4-2-4のグラフに示したように、この指標に基づく「読解力」スコアは上位群>中位群>下位群となる傾向は「Ⅱ-a」を除いて認められ、危険率も10%台にとどまっており、その効用は否定される訳ではない。しかし、組織的環境整備状況を測るより精緻な指標作りは今後の課題として残った。

なお、参考までに、図表4-2-5に、この9項目からなる「組織的環境整備指導状況スコア」を用いて、「Ⅱ-a 豊かな素材に触れる環境の整備」「Ⅱ-b 豊かな教育カリキュラムの整備」「Ⅱ-c 実社会への適用の場・機会の設定」の3つのフェーズにおける整備状況を平均以上を「○」、未満を「×」として、その組み合わせから学校を8つのパターンに分類し、各パターンの子どもたちの「読解力」スコアを比較し、大きい順に並べ替えて示した。

図表4-2-5 「組織的環境整備状況」の8パターンと「読解力」スコアの関係 (小5)



当初のねらい通りに「組織的環境整備状況」の指標がうまく設定できていれば、全てのフェーズで「×」となるパターンHの「読解力」スコアが最も低くと予想されたが、結果的には「G」のスコアが28.8と他とかけ離れて低く現われた。ただ、「構成比率」にも示したように、「G」のパターンとなった学校は全体の3.4%、校数にして1校のみであり、この1校が「読解力」スコアを大きく引き下げているという状況は無視できない。

なお、この図表から見る限り、平均スコア50以上のパターン「A, F, B, D」と50未満のパターン「E, H, C, G」を明確に分ける、言い換えれば「読解力」スコアの高低を弁別するフェーズは「Ⅱ-b」となっており、「Ⅱ-b 豊かな教育カリキュラムの整備」が重要な役割を果たしていることが分かる。(平均以上のパターンでは、いずれもⅡ-bは「○」、未満のパターンではいずれも「×」となっていることに注目)

しかし、スコアが最も高いのは、3つのフェーズにおいていずれも「○」となっているパターン「A」であるという点に注目すれば、直接的な教育

カリキュラムの整備・充実だけではなく、やはり「豊かな素材に触れる教育的環境」や「学びを社会へと適用させる場の設定」等も含めたバランスのとれた環境整備が重要となってくることがわかる。

以上、十分とは言えないながらも、「学校全体としての組織的な教育環境の整備・充実」によって、子どもたちの「読解力」スコアに違いが生じてくることを確認してきた。

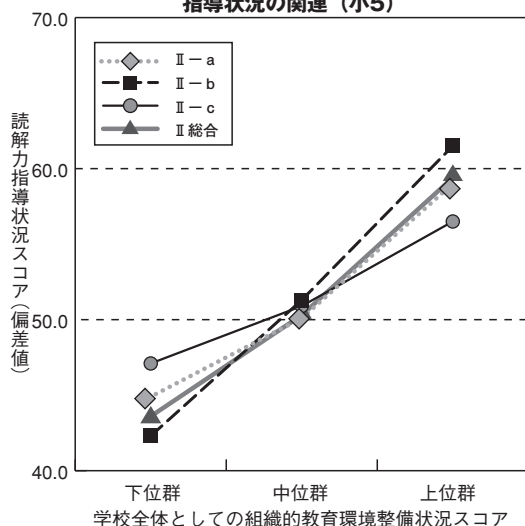
ここで、もう一つ、組織的な環境整備の状況と個々の教師の指導状況の関連について探った結果を紹介しよう。図表4-2-6は、先の9項目からなる「組織的環境整備状況」スコアによって学校を3群に分類し、各群に属する学校の教師の「読解力指導状況スコア」にどのような差異があるかを比較したものである。例によって、3群の分類は学校としての整備状況スコアを偏差値換算し、60以上を上位群、40以上60未満を中位群、40未満を下位群とし、上位群と下位群の「指導状況スコア」(偏差値)の差の検定を行った。

図表4-2-6 組織的教育環境整備状況による教師の読解力指導状況スコアの違い (小5)

	下位群	中位群	上位群	差異 (上位-下位)	P値
Ⅱ-a 豊かな素材に触れる環境の整備	44.9	50.1	59.0	14.1	P=0.001
Ⅱ-b 豊かな教育カリキュラムの整備	42.3	51.3	61.5	19.1	P=0.000
Ⅱ-c 実社会への適用の場・機会の設定	47.1	50.9	56.5	9.5	P=0.019
Ⅱ 教育環境・教育課程の整備状況全体	43.6	50.3	59.4	15.7	P=0.000

また、図表4-2-7は、その結果をグラフにしたもので、学校全体としての「組織的環境整備状況」と教師個人の「読解力指導状況」との間には明らかに正の強い相関が見受けられる。

図表4-2-7 組織的教育環境整備状況と読解力指導状況の関連 (小5)



前節での結果を踏まえ、上記の結果を言い換えると、子どもの「読解力」向上において、教師の日常的な学習指導は重要な影響を示しているが、その教師の指導力は、学校全体としての組織的な教育環境の整備・充実の度合いによっても大きく左右されるということになる。

つまり、「読解力」の向上に際しては、教師個人の指導力や資質の向上のみではなく、教師個人の枠を超えた学校の組織力が極めて重要になってくるとことを示すデータなのである。

### 3 学校経営基盤の整備・充実状況の違いが教師の指導状況の違いとなって現われている

最後に、「読解力向上に関する取り組みの基本構造モデル」の第Ⅰ層「(Ⅰ)『読解力』向上を支える学校基盤のマネジメント(MORE)」に関する各項目について見てみたい。

まず、これまでの第Ⅲ、Ⅱ層に関する項目と同様の手順で、第Ⅰ層における各項目に対する校長

の回答状況とその学校の子どもたちの「読解力」スコアをクロスし、校長の学校基盤のマネジメントの状況が子どもたちの「読解力」にどのように関連しているのかを調べた。図表4-2-8はその結果を示す。



図表4-2-8 校長の学校経営状況の違いによる子どもの「読解力」スコアの違い

カテゴリー	設問番号	設問	学年	上位群	下位群	差異	検定	分類
I-a 基本方針の設定と共通理解の推進	③教育重点目標の設定 問8-3	「読解力」育成を、自校の「目指す子ども像」や重点目標に組み込んでいる。	小5	54.8	48.5	6.3	*	共通
			中2	52.9	47.9	5.0	+	ケース⑨
	④学力観の共通認識 問8-5	「読解力」育成のために求められる学力観について、校内で共通理解を図っている。	小5	52.5	50.4	2.1	-	中2
			中2	54.3	48.4	5.9	+	ケース⑤
	⑤学級経営の共通認識 問8-6	「読解力」が育ちやすい学級経営のあり方や子どもへの接し方についての共通理解を図っている。	小5	51.3	51.7	-0.4	-	中2
			中2	57.6	48.6	9.0	*	ケース⑤
I-b 教育資源や環境の整備・活用	①学校図書館の充実・活用 問8-12	学校図書館の充実に努め、授業での活用や家庭での読書を促している。	小5	51.5	51.5	0.0	-	中2?
			中2	52.6	48.9	3.7	?	ケース⑧
	②公共文化施設の有効活用 問8-13	公共の図書館や博物館、美術館などの文化施設の活用を促している。	小5	51.5	51.4	0.2	-	中2
			中2	54.2	46.6	7.6	*	ケース⑥
	③ICT環境の充実・活用 問8-14	インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に努めている。	小5	53.0	46.3	6.8	*	共通?
			中2	51.2	44.6	6.6	?	ケース⑩
I-c 教育課程の整備・充実	①全体計画の策定 問8-7	「読解力」向上のために各教科や総合的な学習の時間、特別活動における指導内容や方法を明らかにしている。	小5	55.9	48.1	7.8	**	小5
			中2	51.6	49.4	2.2	-	ケース②
	問8-18	「総合的な学習の時間」や各教科での課題探究型の学習を充実させている。	小5	55.4	49.5	5.9	*	共通
			中2	53.4	47.9	5.5	+	ケース⑨
	問8-19	朝読書やNIE活動において、要約・紹介するなどの「読解力」向上につながるような活動を工夫している。	小5	49.5	56.1	-6.6	*	中2
			中2	51.6	46.6	5.0	+	ケース⑤
	③各種学習指導法の導入 問8-21	パソコンや紙などいろいろなメディアで自分の作品や考えを表現する活動を重視している。	小5	53.5	47.3	6.2	*	共通
			中2	54.1	44.8	9.2	**	ケース⑨
	問8-22	作品や発表内容について相互に建設的な批判を伴う深い批評をし合うことを重視している。	小5	51.3	51.6	-0.3	-	中2?
			中2	56.6	47.2	9.5	**	ケース⑦
	問8-23	ダイアログや討論を通して、グループとしての意見を練り上げていくような集団思考力の育成を図っている。	小5	51.4	51.6	-0.3	-	中2?
			中2	52.4	48.3	4.1	?	ケース⑦
I-d 校内組織や協力体制の充実・強化	①推進組織の設置 問8-4	「読解力」向上のための推進組織を設けている。	小5	54.6	50.7	3.9	?	共通?
			中2	54.5	48.9	5.6	?	ケース⑩
	②研修・授業研究の機会 問8-9	「読解力」育成の指導力向上のために、校内研修や授業研究の機会を設定している。	小5	52.6	50.3	2.3	-	中2
			中2	54.7	47.9	6.8	+	ケース⑥
	④保護者との連携 問8-11	保護者に対して、「読解力」向上のために家庭でできる支援を求めている。	小5	55.8	49.3	6.5	*	小5
			中2	50.2	48.5	1.7	-	ケース②

ただ、前回の「基本調査2004」でも述べたように、その結果を校長による子どもたちへの直接的な働きかけによるものと考えるよりも、今見てきたような学校全体としての組織的教育環境の整備や、教師への指導・助言・研修といった校長の種々の働きかけ等を通じて間接的に子ども達の「読解力」育成に寄与していると考えの方が現実的であろう。

そこで、第I層に関しては、子どもたちの「読解力」スコアへの影響を探ることはせず、校長の

マネジメントの状況を問う26項目について教師の日常的な学習指導状況との関連を中心に探ることとした。図表4-2-9ではその結果を示した。なお、教師の学習指導状況スコアは、前節で設定した20項目からなる「読解力指導状況」指標によって算出した各教師スコアをもとに学校平均を求め偏差値換算したものをを用いている。またクロス集計単位は、「校長の回答状況」Vs「教師集団平均スコア」としている。

図表4-2-9 校長の学校経営状況の違いによる教師の指導状況スコアの違い（小5）

カテゴリー	設問番号	設問	上位群	下位群	差異	検定	検定	
I-a 基本方針の 設定と 共通理解の推進	①育成基本方針 の明示	問8-1	「読解力」育成・向上を学校全体の方針として教職員に提示している。	52.0	48.5	3.5	0.129	?
	②現状・課題の 把握	問8-2	自校の子どもの「読解力」の現状について把握している。	52.3	47.6	4.7	0.064	+
	③教育重点目標 の設定	問8-3	「読解力」育成を、自校の「目指す子ども像」や重点目標に組み込んでいる。	53.9	47.6	6.2	0.025	*
	④学力観の共通 認識	問8-5	「読解力」育成のために求められる学力観について、校内で共通理解を図っている。	50.3	50.8	-0.6	0.430	-
	⑤学級経営の共 通認識	問8-6	「読解力」が育ちやすい学級経営のあり方や子どもへの接し方についての共通理解を図っている。	53.4	46.8	6.6	0.015	*
I-b 教育資源や 教育環境の 整備・活用 (II-aと共通)	①学校図書館の 充実・活用	問8-12	学校図書館の充実に努め、授業での活用や家庭での読書を促している。	52.9	48.5	4.4	0.086	+
	②公共文化施設 の有効活用	問8-13	公共の図書館や博物館、美術館などの文化施設の活用を促している。	49.8	51.9	-2.2	0.252	-
	③ICT環境の 充実・活用	問8-14	インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に努めている。	51.5	47.5	4.0	0.158	?
	④校内の言語環 境の整備	問8-15	教師の日常の授業での言葉遣いや話す・聞くルールを定め、校内の言語環境の精錬を図っている。	50.6	50.4	0.2	0.487	-
I-c 教育課程の 整備・充実	①全体計画の策 定	問8-7	「読解力」向上のために各教科や総合的な学習の時間、特別活動における指導内容や方法を明らかにしている。	53.9	48.0	5.8	0.034	*
		問8-17	「読解力」育成をテーマとした全体カリキュラムを作成している。	50.8	50.0	0.9	0.394	-
	②達成目標・評 価基準策定	問8-20	子どもの発達段階に応じた「読解力」の達成目標と評価基準を作成している。	53.4	49.7	3.8	0.165	?
		問8-18	「総合的な学習の時間」や各教科での課題探究型の学習を充実させている。	54.8	48.4	6.4	0.035	*
		問8-19	朝読書やNIE活動において、要約・紹介するなどの「読解力」向上につながるような活動を工夫している。	50.8	50.0	0.7	0.397	-
		問8-21	パソコンや紙などいろいろなメディアで自分の作品や考えを表現する活動を重視している。	51.9	48.0	3.9	0.122	?
		問8-22	作品や発表内容について相互に建設的な批判を伴う深い批評をし合うことを重視している。	50.0	51.1	-1.1	0.368	-
		問8-23	ディベートや討論を通して、グループとしての意見を練り上げていくような集団思考力の育成を図っている。	50.3	51.0	-0.7	0.432	-
		問8-24	職場体験など、実社会に触れさせる体験的学習を重視している。	49.9	51.5	-1.6	0.315	-
	問8-25	「総合的な学習の時間」などで、学習の成果を地域社会に向けて発信する機会を創っている。	51.2	48.9	2.3	0.241	-	
④教科や総合学 習間の連携	問8-8	教科間の連携や、各教科と総合的な学習の時間、情報教育などの相互の連携を図っている。	51.1	48.6	2.5	0.199	?	
I-d 校内組織や 協体制の 充実・強化	①推進組織の設 置	問8-4	「読解力」向上のための推進組織を設けている。	53.7	49.8	3.9	0.197	?
	②研修・授業研 究の機会	問8-9	「読解力」育成の指導力向上のために、校内研修や授業研究の機会を設定している。	49.6	51.5	-1.9	0.281	-
		問8-10	小・中学校で「読解力」について情報交換や系統的な指導について協議する機会を設けている。	50.2	51.1	-0.9	0.389	-
	③教師の資質向 上	問8-16	教師に対して読書や研究論文の作成を奨励するなど教師自身の「読解力」向上を促している。	50.5	50.6	-0.1	0.488	-
④保護者との連 携	問8-11	保護者に対して、「読解力」向上のために家庭でできる支援を求めている。	52.9	49.4	3.5	0.156	?	
その他	問8-26	朝礼などで子どもの考える力を刺激するような講話をこころがけている。	55.7	47.2	8.5	0.003	**	

図表に示すように、校長の回答状況によって2群(平均以上の上位群と未満の下位群)に分類された学校群における教師の読解力指導状況スコアは、26項目中18項目で上位群>下位群となったが、残りの8項目では逆転している。また、18項目の中

でも差の検定結果が20%水準を越えるものが3項目あったため、教師の読解力指導状況により影響度の強い項目を上位10項目に絞った結果を図表4-2-10に示した。

図表4-2-10 教師の読解力指導状況に強い影響を及ぼす学校経営状況項目ベスト10(小5)

カテゴリー		設問番号	設問	上位群	下位群	差異	検定	検定
I-a 基本方針の 設定と 共通理解の推進	②現状・課題の 把握	問8-2	自校の子どもの「読解力」の現状について把握している。	52.3	47.6	4.7	0.064	+
	③教育重点目標 の設定	問8-3	「読解力」育成を、自校の「目指す子ども像」や重点目標に 組み込んでいる。	53.9	47.6	6.2	0.025	*
	⑤学級経営の共 通認識	問8-6	「読解力」が育ちやすい学級経営のあり方や子どもへの接し 方についての共通理解を図っている。	53.4	46.8	6.6	0.015	*
I-b 教育資源や環境 の整備・活用	①学校図書館の 充実・活用	問8-12	学校図書館の充実に努め、授業での活用や家庭での読書を促 している。	52.9	48.5	4.4	0.086	+
	③ICT環境の 充実・活用	問8-14	インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に 努めている。	51.5	47.5	4.0	0.158	?
I-c 教育課程の 整備・充実	①全体計画の策 定	問8-7	「読解力」向上のために各教科や総合的な学習の時間、特別 活動における指導内容や方法を明らかにしている。	53.9	48.0	5.8	0.034	*
	③各種学習指導 法の導入	問8-18	「総合的な学習の時間」や各教科での課題探究型の学習を充 実させている。	54.8	48.4	6.4	0.035	*
		問8-21	パソコンや紙などいろいろなメディアで自分の作品や考えを 表現する活動を重視している。	51.9	48.0	3.9	0.122	?
I-d 校内組織や体制 の充実・強化	①推進組織の設 置	問8-4	「読解力」向上のための推進組織を設けている。	53.7	49.8	3.9	0.197	?
	④保護者との連 携	問8-11	保護者に対して、「読解力」向上のために家庭でできる支援 を求めている。	52.9	49.4	3.5	0.156	?

次に、これらの10項目を以って「読解力」を支える学校基盤マネジメント状況(以下、マネジメント状況とする)を測定する指標とし、第I層の4つの各下位領域についてのマネジメント状況スコア

を算出し、例によってそのスコアによって上位・中位・下位の3群に学校を分類した。そして、各群に属する学校の教師の「読解力指導状況」スコアの平均値を比較したものが図表4-2-11である。

図表4-2-11 「マネジメント状況スコア」による教師の読解力指導状況スコアの違い(小5)

	学校基盤 マネジメント 指標による 校長区分	指導力全体		多彩な情報活用		総合的働きかけ		読解への誘い	
		教師の指導 状況スコア	差の検定 (上位-下位)	教師の指導 状況スコア	差の検定 (上位-下位)	教師の指導 状況スコア	差の検定 (上位-下位)	教師の指導 状況スコア	差の検定 (上位-下位)
I-a 基本方針の 設定と共通 理解の推進	上位群	56.6	0.022	57.4	0.026	55.5	0.021	48.8	0.303
	中位群	50.0		49.9		50.0			
	下位群	46.8	*	49.3	*	46.7	*	50.3	-
I-b 教育資源や 環境の整備 ・活用	上位群	59.0	0.005	63.2	0.000	55.5	0.041	61.6	0.000
	中位群	50.4		50.3		50.5			
	下位群	47.5		**		48.9		**	
I-c 教育課程の 整備・充実	上位群	54.7	0.015	55.1	0.088	54.7	0.006	45.3	0.149
	中位群	52.0		51.3		51.6			
	下位群	45.3	*	49.1	+	45.5	**	48.1	?
I-d 校内組織や 体制の充実 ・強化	上位群	55.0	0.143	54.4	0.366	55.1	0.055	48.3	0.243
	中位群	50.0		49.9		50.1			
	下位群	48.8	?	52.5	-	47.5	+	50.7	-
I 読解力向上 を支える 学校基盤 マネジメント	上位群	57.9	0.007	57.7	0.200	57.1	0.003	47.4	0.220
	中位群	49.8		50.2		49.7			
	下位群	44.7	**	50.9	-	44.6	**	50.3	-

まず、表頭の「指導力全体」と書かれた列を見ると、校長の「マネジメント状況」の高低が、教師の「読解力指導状況」スコアと強い正の相関を示していることが分かる。また同じく「総合的な働

きかけ」においてはよりその傾向が顕著となり、「読解力」向上を支える学校基盤のマネジメント状況を測定する指標として今回設定した10項目は概ねうまく機能していると判断できる。

そこで、次に第Ⅰ層の4つのフェーズのうち、どのフェーズが教師の「読解力指導状況」に最も強い影響を及ぼしているかをみてみると、「Iーb 教育資源や環境の整備・活用」において、教師の指導状況は「多様な情報活用」「総合的な働きかけ」「読解への誘い」のどの観点においても有意差が見られることが分かる。特に、網掛けをした「多様な情報活用」の観点における上位群と下位群のスコアの差異は約15と最も大きい。具体的にどのような項目がそれぞれの指標となっているかをみれば、「Iーb」では「ICT環境の充実・活用」および「学校図書館の充実・活用」、また教師の「多様な情報活用」では「ICTの有効活用」および「知識・語彙の拡大」に関する項目が入っており、教師のICTの活用が効果的に機能するためには、学校全体におけるICT環境の充実が大前提となっており、学校としての明確な方向性と具体的な取り組みが教師の学習指導を一層促進するという極めて当たり前の結果がデータでもはっきりと証明された。このことは「知識・語彙の拡大」という教師の学習指導と「学校図書館の充実・活用」という学校基盤のマネジメントの在り方においても同様のことが言えるのである。

次に影響度が大きいのは、「Iーc 教育課程の整備・充実」であるが、ここでも、網掛けをした「総合的な働きかけ」の観点で上位群と下位群の差異は最も大きくなる。同様に中身を見ていくと、「Iーc」では「課題探究型学習」や「パソコン等様々なメディアによる表現活動」の導入・推進が、また教師の学習指導としての「総合的な働きかけ」

でもそれに呼応した「課題探究型の学習指導」や「パソコン等も活用した表現活動」等が項目として含まれており、先の「Iーb」と「多様な情報活用」との間における関係が適用される。

実はこのこと自体は偶然の結果ではなく、第2章1節で紹介した「読解力向上に関する取り組みの基本構造モデル」(図表2ー1ー6)に最初から仕組まれていた枠組み(仮説)であり、言い換えれば、今回の結果はこの基本構造モデルの妥当性を検証したものである。

そして、ここまでの結果は、『読解力』は『総合学力』と同様、教師・学校・家庭の総合的な働きかけのもとに育成される」という今回の調査の基本仮説3の「教師・学校」に関わる部分についてほぼ検証することができたと考える。なお、前節同様、中学校における考察が不十分であり、今後の大きな課題として残ったことを改めて付記しておく。

次の第3節では、「家庭における働きかけ」の効用を探るとともに、教師・学校・家庭の総合的な働きかけについても見ていくことになる。

その前に、前節と同様、本研究会メンバーであり、学校現場において「読解力」向上に積極的に取り組んでおられる大阪教育大学附属平野中学校の井寄芳春先生に、ご自身の実践等も踏まえながら、今回の調査結果が「読解力」向上に向けての具体的な取り組みにどう活かせるか、また十分に言及できなかった中学校における取り組みの在り方等についてコメントをいただく。

本節のテーマとデータ・分析を受けて

# 自己の考え方を表明し合い、 相互に合意を形成していく学校組織へ

大阪教育大学附属平野中学校 井寄 芳春

## ◆ 1. はじめに

確かな学力の育成を目指す学校、教師にとって、「読解力向上」は避けて通ることができない重要な課題である。むしろ、「読解力」向上に向けて自校の教育資源やカリキュラム、授業の質を問い直していくことが、確かな学力に向けての着実な一歩であろう。ただし、どの方向に向けて、どう進めばいいのだろうか。現在は暗中模索の状態であろう。しかも、総合学力研究会が明らかにしているように、「読解力」向上は一教科、教師個人の取り組みで実現するものではない。学校が全体として、多面的、重層的、総合的に取り組むことが要請されている。

「読解力向上に関する取り組みの基本構造モデル(以下、構造モデル)」は、「読解力」向上、ひいては確かな学力の育成に向けて、学校が経営ビジョンと具体的方策を立てる際の「マップ」である。しかも、この「マップ」上に矢印で、進むべき「ルート」と「ステップ」を示している。教師が自己の授業改善に取り組む際にも、学校を基盤とするカリキュラム開発に着手する際にも、この構造モデルをレポーターやフレームワークにして構想を練ることができる。

「教育環境の整備・充実」は、「読解力向上を支える学校基盤のマネジメント」と「教師の日常的な学習指導」の中間項的な位置を占めている。マクロなマネジメントとミクロな学習指導の接点として、この第Ⅱ層の役割は大きい。また、第Ⅱ層を充実させることにより、第Ⅰ層と第Ⅲ層を活性化するという経営戦略を立てることも可能である。

本節は、この構造モデルの第Ⅱ層、「教育環境の整備・充実(FAN+MORE)」と第Ⅰ層、「読解力向上を支える学校基盤のマネジメント(MORE)」に示した領域・項目に対する検証である。中学校の一教員として、どこまで的を射た言及ができるか心許ないが、普段、感じていることや考えていることを手がかりに若干のコメントをしたい。ただし、紙幅の関係で、第Ⅱ層を中心にコメントさせていただいた。

## ◆ 2. 「読解力」向上を指向する学校組織運営のあり方

### (1) 「教師力×経営力」としての組織力

『「読解力」の向上に際しては、教師個人の指導力や資質の向上のみではなく、教師個人の枠を超えた学校の組織力が極めて重要』とある。また、「学校全体としての『組織的環境整備状況』と教師個人の『読解力指導状況』との間には明らかに正の強い相関が見受けられる」という結果もある。特定の限られた教員の個人的な努力だけではなく、学校運営、学校組織として「読解力」向上に取り組むことの重要性、切実性を示している。「読解力」向上に取り組む教師たちにとっては、大変心強く感じる指摘である。

「学校の組織力」は、一人ひとりの「教師力」と校長の「経営力」の「積」として表現されるべきものであると考える。第Ⅱ層は、「FAN+MORE」ではなく、「FAN×MORE」の方が妥当であろう。教師力の中身には、学校の組織運営に深くコミットしつつ、子どもの発達や可能性をひらいていく力が含まれる。また、経営力とは、より創造的、実践的な学校組織をつくり、運営する力が含まれている。学校組織は単に校務分掌を指しているものではない。学校でカリキュラムを開発し、機能させ、改善していくための多様な“プロジェクト”の集積である。このような学校組織は、自校の教育を具体的に動かしていく内発的な力を持たなければならない。

### (2) 校務分掌とプロジェクトチームの効果的な配置

学校組織はともすると前例踏襲主義に陥りやすい。前年度までの成果をもとに、本年度の教育課程を編成するのが学校の「慣わし」である。けれども、教育をめぐる諸課題が学校に押し寄せてくる今日、従来型の学校組織では対応できない事例も数多くなっている。十分な評価もせずに、三学期に慌ただしく来年度の

教育課程を編成することにも問題がある。

「読解力向上に関わる教育環境」として何を、どこまで整備し、充実していくのが望ましいのか。また、そのために教育資源(人、モノ、環境、情報)をどう活用すればいいのか。これらのことは、従来の校務分掌の枠組みを超え、分掌や学年、教科を横断するプロジェクトの中で、集中的に審議し、年度途中であっても、改善策を提案し、修正していくことが望ましい。

従来の校務分掌を「ストック」とすれば、プロジェクトは「フロー」にあたる。このような、ストックとしての校務分掌、フローとしてのプロジェクトチームをバランスよく、有機的に関連づけ、学校の諸課題に柔軟に対応することが求められる。校務分掌は一年間の職務であり、メンバー、仕事内容が固定されている。それに対して、プロジェクトチームは、「プロジェクト」中心に動くため、期間もメンバーも柔軟であり、仕事内容も変化する。

プロジェクトチームが十全に機能するためには、プロジェクトの進捗状況をオープンにし、誰でも意見を述べる機会が与えられなければならない。各プロジェクトの目的と最終ゴール地点を確認しあった上で、実現可能な選択肢を提案し合う必要がある。いくらすぐれた提案でも、実現不可能なものであれば、徒労感だけが残り、改善への意欲は低下していく。

ただし、プロジェクトを乱立させてしまえば、教師の時間を奪うばかりで、肝心の教材研究や子どもの指導にあたる時間を削ってしまうことになる。自校に今、どのようなプロジェクトが必要なのか、優先順位は何か、誰をプロジェクトリーダーにし、どのようなメンバーで構成するのか等を見極めていくリーダーの眼力が欠かせない。

校長の『「マネジメント状況」の高低が、教師の『読解力指導状況』スコアと強い正の相関を示している』とある。校長が明確で具体的なビジョンを示し、教師を支え、励まし、鍛える必要があろう。この点からも、「学校経営状況項目ベスト10」(図表4-2-10)の設問に沿って、教師の読解力指導状況を改善していくことが望ましいと考える。

### (3) プロジェクトの中身をどうするのか—自校の教育課題に即した「選択と集中」—

「読解力」向上を目指す場合、どのようなプロジェクトを立ち上げていくことが必要なのだろうか。限られた教育資源から最大の効果を引き出すにはどうすればいいのだろうか。そのヒントが、「教育環境の整備・充実」の下位項目にある。例えば、「豊かな素材に触れる環境の整備・充実」の下位項目—「学校図書館の活用」や「ICTの充実活用」等に関するプロジェクトチームをつくり、人員(2名以上)、期限を決め、自校の強みや弱みを分析しながら一定の方向性を示す。このチームには、ベテラン、若手、異教科、様々な組み合わせが考えられる。このようなプロジェクトを運営すること自体が自校の課題に沿った教員研修にもなる。

もちろん、下位項目のすべてにわたって取り組むことはできない。自校の教育課題を十分に検討した上で、2~3程度のプロジェクトチームをつくり、重点的に取り組むことが望ましい。

これから「読解力」向上に向けて取り組もうとする学校は、「『読解力』育成により大きな影響を及ぼす項目」(図表4-2-1)を参考にしてはどうだろうか。例えば小学校(5年生)では、「問6-3 各教科の学習指導において、課題探究型の活動を取り入れている」、「問6-4 各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入れている」こと。中学校(2年生)では、「問8-15 教師の日常の授業での言葉遣いや話す・聞くルールを定め、校内の言語環境の精錬を図っている」ことが有効である。すでに、多くの教師はこのような取り組みを実施しているだろう。しかし、学校として組織的に、系統的に実施しているかという点必ずしもそうなっていないのではないだろうか。

例えば、「課題探究型の活動が本当に各教科で実施されているのか。」「課題探究型活動は、教科の特性にどう配慮しているか。」「発達段階によってどのようにレベルアップを図っているのか。」等について、教師間でどこまで共有化されているだろうか。このような課題に対し、「課題探究型の活動」の質的充実を促すための方策を検討するプロジェクトチームをつくり、文献や先進校にも学びながら提案する。このことは教師自身の「読解力」を高めることにも通じる。

もちろん、「課題探究型の活動」の内容や方法、形態は多様である。一つのパターンを強要するものではなく、教師の独自性が尊重されることが望ましい。けれども、他教師、他教科の方略に学ぶ機会が学校システムとして保障されていることは、「読解力」向上に向けての指導改善の基盤となる。このようなオープンな相

互学習を促進する学校システムを構築するためのプロジェクトチームを結成するのである。

すでに自校で実施している取り組みを強化していくという方法もある。現在、実施していないが、自校の弱点なのでぜひ取り組みたいという項目もあろう。さらに、プロジェクトチームとしてではなく、校内研修という形で、教職員のアイデアや経験、意見を集約し、「読解力」向上に向けての学校改善に役立てることも可能である。いずれにしても、個々の教師の暗黙知を「読解力」向上のためのディスカッションの場に引き出し、知恵を共有しながら、効果や成果を確認しあい、さらなる改善ポイントを探っていくような機会を創出していくことが大切である。

### ◆ 3. 中学校における「読解力」向上のあり方

本節では、主として小学校の調査結果からの言及が中心になっている。小学校では、「読解力」スコアの高低を弁別するフェーズは「Ⅱ-b」となっており、「Ⅱ-b 豊かな教育カリキュラムの整備」が重要な役割を果たしていることがわかる。一方、中学校では、「Ⅱ-a」の「豊かな素材に触れる環境の整備・充実」の有効性が高い傾向がある。また、小学校と共通しているが、「問8-14 インターネットの利用環境やパソコンのコンテンツの充実に努めている。」も「Ⅱ-a」である。

第4章1節で述べたように、現段階では、小学校と中学校の差異の原因や背景を詳細に分析することよりも、小学校と中学校で指導の重点をどのあたりに置けばいいのかを探る程度でいいものとする。けれども、小学校と中学校では発達段階が異なり、「読解力」向上のための指導方略やカリキュラムのあり方については、重点の置き方にも自ずと違いがあるものとする。

教科指導において、小学校と中学校の違いは、主として、「①学級担任制から教科担任制に変わるとともに教科内容も専門化、高度化する。」「②新たに英語科や技術家庭科が加わる(算数が数学に、図画工作が美術になる)。」「③新たに選択教科が加わる。」「④定期テスト、実力テスト等があり、学校、家庭においては、試験に対する学習が大きなウェイトを占めることになる。」「⑤中学後半からは、高校進学のための受験対策がますます重視される。」等がある。中学校では小学校と比べて、教科横断的な指導が困難になると同時に、子どもの学習負担も増える。また、子ども間の学力差、学習意欲の差がさらに広がり、少人数指導やティーミング等の指導体制を構築することも、ますます強く求められるようになっている。

特に、数学、英語、国語等の積み上げが必要な教科においては、学級における学力差の拡大により、指導が困難になってきているのが実状である。中学校の教師は、「読解力」向上に向けて取り組みを始めることよりも、教科の力を向上させることに追われている。「読解力」向上を自教科の指導に生かそうとする教師・教科(特に国語科)はあるかもしれないが、学校として、組織的に取り組むことは乏しい。

小・中連携が進む今日、中学校においても「読解力」と教科学力を関連づけ、両者を高めていくような指導のあり方を検討していかなければならない。そこで、今後、中学校において、組織的に「読解力」向上に取り組むためのポイントを以下に示す。

#### (1) 共同して、集中を生み出す学習環境を創る

もとより、「教師の授業力」は大切であるが、一方で、「生徒の“受”業力」を高めることも重要である。受容的で安定した人間関係をつくることとともに、「前進的で、緊張感のある集中」を一人ひとりに成立させることが大切である。ある程度、教師間で、学習ルールを共有し、きちんと守らせる指導が必要である。一方で、多様な表現機会、発表機会を設け、子どもたちがやらざるを得ない状況に追い込んでいくような仕掛けも求められる。

#### (2) 「選択教科」、「総合的な学習の時間」を充実させる

本校では、基礎定着型の選択教科(3年生・週1時間)と発展型の選択教科(2・3年生合同・週2時間)を開設している。また、1年生の総合的な学習の時間(STEP)では、すべての教科の基礎となる情報活用力を高める学習、2・3年生合同の総合的な学習の時間(JOIN)では、課題探究型の学習を展開している。

このように、選択教科や総合的な学習の時間は教科書がなく、自校でカリキュラムを編成できる。これらの時間に「読解力」向上を指向した教育プログラムを実施することは可能である。

### (3) 各教科で、習得・活用・探究のバランスを図る

習得(基礎定着)と探究(応用・発展)のバランスを図ることが大切である。そのためには、個別指導、一斉(集団)指導を効果的に配しつつ、習得すべきことは徹底的に反復して習得させ、その上で、探究場面を生かしていくような指導を工夫する。「教科を絞って家庭学習に取り組みさせる」「どの教科でもノート指導を充実させる」ことも組織的な取り組みとしてあげられよう。小学校との連携が求められる分野である。

### (4) 「読解力」向上に道徳の時間、学校行事を生かす

「道徳の時間」や「特別活動」は、どの教師も指導を共有し、共通して指導にあたる教育活動である。このような時間に、「読解力」向上に資する活動を仕組むことができるだろう。読む、書く、話す、聞くことを中心に、多様な読解活動を組織し、子どもたちが自分で考え、表現し、行動する機会を創り出していくのである。

特に、中学校では進路指導を重視する。職業生活も視野に入れ、自分の将来について考えさせる場において、多様なテキストに触れさせ、考えさせることが必要である。

## ◆ 4. コミュニケーションがひらく「読解力」向上のための基盤

本節は、「学校組織としての取り組みと子どもの読解力」が主題である。学校組織も「読解力」も基本はコミュニケーションの量的拡大と質的充実である。社会への参加や効果的な問題解決にあたっては、コミュニケーション能力に追うところが大きい。他者に対し、自己の考えを表明し合い、相互に合意を形成していくことにより、自己の考えがいつそう深まっていく。この「自己の考えを表明し合い、相互に合意を形成していく」ことが学校組織としての取り組みに不可欠の要素である。

普段、教師間のコミュニケーションが乏しい組織ほど、会議時間が長い割に、意思統一がなかなかできないと聞く。普段から、子どものこと、授業のことについて、コミュニケーションが活発な学校では、課題が共有されやすく、組織は活性化し、フォーマル、インフォーマルを問わず、必要なプロジェクトが、教師の内発的な動機に導かれて形成される。

このようなコミュニケーションを切りひらくのは、「一人から」である。コミュニケーションを通して、多様な他者と経験を交流することを楽しみながら、自らも豊かになっていくことを目指してはどうだろうか。